

# 「底が突き抜けた」時代の歩き方 280

同時中枢テロの微細なありかたに 思想が巨大に気づきつつあること

思想家の吉本隆明が『文学界』(01・11)のなかで、「これは新しい姿の見えない敵との戦争である」とブッシュ大統領がいち早く発言したことについて、とんでもないことをいっている。

《そのような認識がなされた理由は、もちろん、6千人を越えると言われる犠牲者が国の中心であるニューヨークで出てしまって、それに驚愕したことにあると思います。ただ、それは表面的なことで、根本的には旅客機をハイジャックして、旅客を降ろさずに道連れにして、ビルに突っ込んでしまったことにあります。

テロリストたちの当面の目的は、世界貿易センタービルという現在の富の一番の中心地と、ペンタゴンという世界戦略の作戦司令部を直接攻撃することだったわけですから、その目的に旅客は全然関係ない。もし、テロリストたちが旅客を降ろして、命を懸けて突っ込んだとしたら、アメリカも「これは規模の大きなテロだ」ということで済ませたと思います。そうであれば、政治的対立や宗教的対立は歴然とあるわけですから、敵対する勢力の本拠地を自分たちの責任において、命と引き換えに破壊した行為であるということになって、人によってはそれを肯定するかもしれない。(中略)

ところが、旅客を道連れにして突っ込んでしまったことについては、どんな思想の持ち主、宗教の持ち主だろうと、あるいは深刻な敵対関係があったとしても、誰が見たって「それは人間的倫理に反するものでおかしいよ」という判断を下すと思うんです。それは人命に対して許しがたい行為だと言わなければならない。ブッシュが「これは新しいかたちの戦争だ」と発言した最大の根拠は、たくさん死んだとか殺したとかではなくて、直接目的に対して無関係な人々を、有無を言わずに道連れにして突っ込んだことで、それはどの立場からも許しがたいぜ、弾劾に値するぞ、という判断がなされたことにあると僕は考えています。》

ブッシュが「これは新しいかたちの戦争だ」と発言したのは、私の考えでは、吉本隆明の見解と異なって、ただ単にアメリカ本土が直接攻撃された点にある筈である。旅客機の乗客を道連れにするかしないかにかかわらず、アメリカ本土が直接攻撃されたことが、ブッシュらアメリカ人のプライドからすれば、戦争に値したのだ。我々日本人から考えるとあまりにも見当違いなパールハーバーを持ち出すのも、アメリカ本土を奇襲攻撃されたという点において重なり合っているからである。ブッシュらアメリカ政府が

このテロをどうしても戦争とみなしたかった理由として、戦争と位置づけることで「新しい姿の見えない敵」を特定することができ、その敵が潜伏する地域（の属する国家）を堂々と攻撃することができるからだと考えられる。

その点での吉本隆明との見方の相違はあるとして、彼の指摘にびっくりしたのは、「旅客機をハイジャックして、乗客を降ろさずに道連れにして、ビルに突っ込んでしまった」という個所である。なぜ驚いたかといえば、私は、たぶん大半の人もそうだろうが、自爆を覚悟して旅客機をハイジャックしたテロリストが旅客を道連れに、ビルに突っ込むのは当然の成り行きだと考え、旅客を道連れにしないなどという発想が選択肢としてありうることなど、思いも寄らなかったからだ。吉本隆明のその指摘には驚いたけれども、その驚きにはありもしない馬鹿げた考えだ、年老いたなという軽侮の念が混じっていなかったといえば、嘘になる。彼のその指摘には、オウム真理教が引き起こした地下鉄サリン事件で、直接関係のない地下鉄の乗客がポアの対象とされてしまったことへの考察がいくら煮詰められていたとしても、立ち止まる気にはとてもなれなかった。

私が吉本隆明の指摘を一笑に付したのは、次のように考えたからである。「テロリストたちの当面の目的は、世界貿易センタービルという現在の富の一番の中心地と、ペンタゴンという世界戦略の作戦司令部を直接攻撃することだったわけですから、その目的に旅客は全然関係ない。」という吉本隆明の捉え方は、おそらくテロリストたちの意図とは異なっていた。彼らの目的は、旅客を道連れにした旅客機をビルに突っ込ませることにあっただろうからだ。ハイジャックした旅客機を爆発させることと、ビルへの突撃をドッキングさせた一石二鳥の作戦だったと推測される。現にアメリカ人だけでなく、世界中の人々が単に旅客機がビルに突撃しただけでなく、旅客の道連れが加算されたことに言い知れぬ不安を覚え、底なしの虚しさに叩き落とされたのではなかったか。少なくとも唯一の超大国アメリカの民衆を一挙に不安に陥れるのに、あれほどの作戦成功の効果はありえなかった。

テロリストたちのアメリカへの憎悪は、アメリカ人への憎悪と重なり合っていた筈だ。要するに、経済と軍事の拠点を直接攻撃することによって、アメリカの威信を失墜させようとしていたなら、更にその上に、アメリカの世界的な経済戦略の犠牲に晒されている貧困地域の人々の不安を、アメリカの人心にも振り撒こうとするのは当然のことであって、それほど突飛な考えとは思われない。評論家の千葉一幹が同じ『文学界』（01・11）の時評に、《従来のハイジャックは、飛行機そのものが目的ではなく、そこに同乗している乗客を人質とすることが目的であった。しかし今回は、飛行機そのものが目的であり、逆にそこにいる乗員乗客は、飛行機を攻撃されないための手段でしかなかった（もちろんその先には、旅客機を手段として世界貿易センタービルやペンタゴンあるいは喧伝されることが事実なら原発への衝突という最終目的が控えているのだが）。

その意味で、今回のハイジャックは倒錯的なのだが、さらに驚くべきは民間旅客機そのものが兵器=爆弾と化したことである（中略）。普通われわれは、戦闘機と旅客機を見誤ることはない。しかし、今回のテロにおいては、その自明の区別が廃棄された。」と書いている。

繰り返すが、「乗員乗客は、飛行機を攻撃されないための手段で」あり、かつ飛行機もるときの爆死を狙った目的でもあったと私は考えるが、それでも旅客機を兵器=爆弾に変えてしまったという見方を含んだ千葉一幹の指摘は、吉本隆明以上に世界のパワーポリティックスを踏まえていることは確かである。千葉一幹はまた、《かつては世界一の高さを誇りアメリカ経済の象徴であった世界貿易センタービルが、跡形もなく倒壊する姿は、われわれが生きる、意味の世界の根底にある虚無を一挙に開示して見せた。（…）旅客機を爆弾に変えるという行為は、単に旅客機の意味=使用法を通常の文脈からはずすということだけでなく、旅客機という「物」からその意味=使用法を剥奪し、その「物自体」の姿を垣間見せたことになる》と書くことによって、とりわけ直撃されたアメリカの人々を陥れる何重もの不安にも視線を届かせている。

テロリストたちは旅客機でも乗客でも、利用できるものは何でも利用してアメリカの威信を失墜させ、不安を増殖させて攪乱する計画を立てているように感じられたので、吉本隆明の見解はピント外れなものとして、その前に一度も立ち止まらずに通り過ぎてきた。少なくともここでの吉本隆明が語っている角度からは、旅客の道連れ問題はまるで説得力を持たなかった。ところが、吉本隆明は加藤典洋を相手（『群像』02・1）に、同じ問題を次の角度から取り扱っている。《「存在倫理」からいくと、ビルの中で巻き添えを食って死んだ日本人も20何人いるし、アメリカ人なら数千人いるわけですが、そういう人と、旅客機をハイジャックして、その旅客を道連れにしたということは、とても微細なように見えても、まるで区別しないとイケないと思えます。片っ方は、従来の社会倫理とか、戦争の場合だったら、戦闘員と非戦闘員は区別しなきゃいけないとかいう程度の社会的、集団的なことに対する倫理があれば、それは解けちゃうわけです。

だけど、今度の場合に関係しているのは、旅客機の乗客は同じアメリカ人であろうと、同民族の人間であろうと、さしあたって金融中枢と軍事中枢に対して打撃を与えたいというモチーフからは全然関係ないということになると思うのです。これは地下鉄のサリンと同じで、偶然そこに乗り合わせたという以外ない。そうすると、これは無関係だ。無関係な者を道連れにすることはいいのか。これは非戦闘員を道連れにしたという、いわゆる従来の型の戦争とちょっと違う倫理を行使しないと、それはいえないぞと考えます。

「存在倫理」みたいなものがあると仮定すれば、あるいはそれを無意識のうちに認めるならば、乗客を道連れにするのは絶対的な悪であるということがいえそうな気がするん

ですよ。ハイジャックした乗客を道連れにしたことは、まず存在していること自体が倫理性を喚起するんだよという倫理性からいけば、これだけが悪で、政治的倫理がどうであろうと、つまり、おれはイスラムの方に同情するよというやつもいっぱいいるでしょうし、いや、ああいうことをやるのはよくはないよというやつもいっぱいいるわけでしょうしね。》

よくよく凝視しなければ、吉本隆明が一人で発言している最初の個所と、加藤典洋を相手に発言しているこの個所との見分けはつかない。この個所でも依然として、「旅客機の乗客は同じアメリカ人であろうと、同民族の人間であろうと、さしあたって金融中枢と軍事中枢に対して打撃を与えたいというモチーフからは全然関係ない」ので、「無関係な者を道連れにすることはいいのか」、乗客は降ろすべきではなかったか、という考えは底流しているからである。要するに、吉本隆明の見方は一貫していて、なに一つ変化しているわけではない。だが、初めの発言と後の発言ではなにかが違う。それは後の発言に、旅客機を突撃されてビルの中で巻き添えを食った人々と、道連れにされた乗客とは、「とても微細なように見えても、まるで区別しないとイケない」という観点が、明瞭に挿入されているところからやってくる。

乗客の道連れに関して、金融中枢と軍事中枢の直接攻撃を目的とするテロリストたちのモチーフから語られるなら、そのモチーフへの疑義は容易に素通りを促すにちがいないが、そのモチーフから解放されて、ビルの死者と乗客の死者を同列に並べることができるか、という問いとして提出されるなら、どうしても素通りするわけにはいかなくなってくる。初めの発言に対する驚きは失笑混じりだったが、今度の驚きはそんな「微細な」ことに視線を注ぐ問いへの出会いにあったし、誰も問うてみせたことのない問いを隆起させる吉本隆明の思想の力に目を瞠らないわけにはいかなかったのだ。そしてその問いを浮上させてくる新たな見方として、「存在倫理」という言葉が生みだされようとしている。

吉本隆明はここで一体、なにをいおうとしているのか。私のやっつけ把握ではこういうことだ。道連れにされた乗客は我々全員に100%重なるけれども、ビルの中で巻き添えを食った人々は必ずしも我々と100%重なるわけではない。地下鉄サリン事件で偶然そこに乗り合わせた乗客も、我々全員に100%重なる人々である。もちろん、道連れにされた乗客も、ビル攻撃で巻き添えを食った人々も、更にアフガン空撃の巻き添えを食った民間人も、死者はすべて同等であるけれども、その死にかたの「微細さ」こそが地下鉄サリン事件でも、今回の自爆テロでも巨大に問われているということだ。この問いを明らかにするためには、従来の社会倫理や政治倫理、宗教倫理あるいは個人倫理や国家的、民族的倫理、要するに既成のどんな倫理を持ってきても、無効であって、どうしてもそこに「存在倫理」とでもいふべき観点を差し込まないと見えてこない、

全く新しい視角を提出しようとしているのに気づく。

2002年2月11日記